武蔵野美術大学建築学科・日月会

Forma-Foro

フォルマ・フォロ

Nov.1. 2002

vol.3 第3号

目次

フォルマ・フォロ エッセイ
立花 直美

インタビュー
坂本 一成

卒業生の素顔
野々瀬 徹

VOICES /
板橋さざなみ幼稚園 ANNEX
遠藤 吉生・遠藤 由美子

TOPICS /
キャンパスの新顔たち
林 美樹

製図室 / COMPETITION
"WEST KOWLOON"
杉江 智・KWAH,Meng Ching

追悼 /
織本匠先生を偲んで
青山 恭之

表紙写真：「代田の町屋」1976
写真提供：多木 浩二

風の見える住処（すみか）

立花 直美　TACHIBANA,Naomi
武蔵野美術大学教授

はるかに遠い中学時代の普通の授業でのことでしたが、万葉集と古今和歌集の違いについて論じ合ったことがありました。二つの歌集の相対化の議論の中で、万葉の世界に共感する心を、自分の体質そのものにしたいと思ったのでした。その時の感情をよく思い出すのです。古今和歌集の世界は私にとってはコンプレックスを感じるほどの華やかな「誘惑」でした。自分を万葉の心の位置におきたいと願ったことが、コンプレックスからの解放を願う作為であったとしても、私のその後のさまざまな選択の芯を保ってきたように思えます。素直にありのままであることの価値を知った、ということでした。

建築に向かう姿勢もそこにあり、土地とともに生きる建築、風の動きを知る建築をつくりたい、ということだけを目標に、全ての学びや仕事がそこに収斂するように、ひとり思い込みの強い仕事を重ねてきたようです。それなのにまだ、旅の道すがら、鄙には稀な、という言葉どおりの美しい街道に出会うと、自分はまだここまで素直につくれていない、と実感します。うまくつくりたいと思う欲から、なかなか開放されません。

時代が大きくカーブを描くたびに、「今度こそ」人間的な住処（すみか）をめざす時代が始まるか、という期待に胸が躍ります。でも、なかなか思うようには進まないものですね。21世紀の環境課題は人間の本質的で正当とも言える「欲」の推進力と真正面から対立するために、実践的に難しい現実に直面しているといえそうです。であるからこそ、今度こそ、と期待が膨らんでいます。

空間の自由について

坂本 一成　SAKAMOTO,Kazunari
東京工業大学教授

坂本先生は1970年から13年間ムサビで教えておられましたがどんないきさつでムサビで教えることになったのですか？

坂本：ムサビの建築学科は芦原先生が中心となっておつくりになった訳ですが、教師が特定の大学の出身者に片寄るのを避けたいとの意向がおありになった。当時東工大の篠原先生のところへ芦原先生からムサビで図学の講師が欲しいとの話があり、研究室でフラフラしていた私が行ってこいと言われ、お受けしたのです。確か1970年だったと思います。当初は非常勤で図学を教え、次の年から専任になりました。

当時先生が教え始められた頃の、大学の雰囲気はどんなでしたか？

坂本：私が行き始めた頃は、芦原先生の新しい建築教育をつくるといった意気込みも感じられ、ものすごく自由な感じがしました。美術大学ということもあったのだろうけど、自由な感じで、学生も活き活きしていたし、私も楽しかった。当時の学生も、何人かはすごく頭が良かった、また何人かはすごく手が動いた、また何人かはすごく元気だった。そういうふうに、ひとつの型にはまっていない。ムサビの学生は面白いと思いました。

ムサビでの授業で印象に残ったことはありますか？

坂本：当時ムサビでは課題の自由選択制で2年生と3年生が私の設計計画のコースをとって、同じ課題をしていました。たぶんそんなことをしている大学はなかったと思いますけど、それは私には違和感はなかった。2年生は2年生なりに、3年生は3年生なりに課題に取り組めばいいのだから。これはとても良かったと思います。学生にとっても自分が相対的に見えて。

坂本先生にとってムサビ時代とは？

坂本：私は東工大にいて、篠原先生から受けた影響は強かったと思います。そこを出て現実の社会の中で、私自身の建築のリアリティー、あるいは建築の考え方を確かめたり、展開しようとしていたところがムサビだったと思います。ムサビは私が建築の仕事をしてきた中で、考え方を形成した中心の時代になるように思います。そこで出合えた人たちとの関係も楽しかったし、それは今も続いていると思います。

坂本先生にとってムサビは居心地が良かったようにみえますが、そんなムサビをお辞めになる経緯を。

坂本：ムサビがとても居心地が良かったのは事実です。東工大へ戻れという話があった時も、私の親しい友人、知人には反対されました。ムサビにいるべきだ、東工大へ戻ると建築に対する考えが変わるのではないかと言われました。それでも、私も古い人間の方なのかもしれませんけど、私の先生である篠原先生から求められたということで、東工大へ戻ることにしました。

ムサビ時代に設計されたのは「雲野流山の家」から「祖師谷の家」までですね。東工大に移られてからは住宅では「House　F」から「House SA」「Hut T」を設計されました。大学を移られてから住宅のネーミングが変わりまし

たね。

坂本:なるほど…言われてみると確かにそうですね。それはたぶん、篠原研究室に長くいたから、ムサビにいる時はそれがそのまま無意識に残っていたのかもしれません。それで東工大に戻ってからは、それに対立させたのかもしれません。

すると東工大に移られて、篠原研究室の呪縛から解き放たれようと意識してネーミングも変えたと…。

坂本:大学を移ったということより、もう少し別のインパクトが…というのは、その当時伊東さん(伊東豊雄)や多木さん(多木浩二)達と一緒に建築を考えていて、建築に対する考え方を共有していた時期と重なるので、そっちの方が強かったと思います。ただちょっとそんなこと(大学を変わったこと)もあるかなと思います。

昨年ギャラリー「間」で展覧会をおやりになりましたが、そのきっかけは何でしょうか。満を喫してなのか、たまたまなのか…。

坂本:たまたまですネー、そう答えないといけないようで。(笑い)何というか、表現したいという気持ちと、表現するのが恥ずかしいという気持ちとが誰にでもあると思いますが、私はそのバランスをうまくとれないのです。それで何もできずにいたのです。それに展覧会は、基本的にだいたい面倒なのですね…。そんな時にたまたま話があったので、できるだけ面倒なことはしないということでやりました。ですから展覧会としてはオーソドックスなものになりました。ただ今までの分はまとめておかないといろいろ不都合が生じることもあり、本はつくりたかったのです。(展覧会の開催に合わせて、「住宅—日常の詩学」をTOTO出版から発刊)

展覧会ではどうしても過去を振り返ることになりますが、過去のものは見たくないとおっしゃっていた坂本先生はどんな気持ちで展覧会に臨まれましたか。

坂本:今でも旧いものは見たくないのですが、例えば〈‥と言って、「日本の現代住宅1970年代」を取り出して〉ここに載っている作品を見ると皆凄まじいですよ形が。ものすごい造形になっている。でもそれはもう古いのです。私のを見るとどうってことない。でも何でもなくても、いけるのではないかと。現代に繋がるのではないかと思った。そう思ったとたん展覧会に昔のものを出してもいいと思いました。例えば「水無瀬の家」にしても素朴で単純です。でもそれはそれなりに存在できているのではないかと感じ始めたことは事実です。

建築について今どんなことを考えておられますか。

坂本:今は私の建築も、例えばHouseSAなどはすごく複雑になってしまっているけれど、それはいいことだとは思っていません。こんな複雑にしないと今の空間にならないのかという反省もあります。ただそうでないと自分の空間にリアリティーが持てないからそうなっているけれど、それをどうにかしたいとつねづね思っています。そうかといって昔の単純さには戻れません。ただこういう言い方をすると、あるところで、そういうふうに駿巡しながらつくっている建築家はめずらしいと言われた。私にはそれは当たり前だと思っているけれど。普通は強いイデオロギーみたいなものが先にあって、それに作品を近づけるのが建築家だということなのでしょうが。

Hut T　2001

すると坂本先生は今何をされようとしてらっしゃるのでしょうか。

坂本:今問題になっているのは建築の制度についてだと思います。建築の制度をどう解体するかと。ただそれは抽象的な問題ではなくて、空間を通した世界が固定化されること、あるいは類型化されることが私には一番楽しくないのです。私が空間をつくるのは、それをどうにか揺さぶってゆきたいということなのです。ですから、特別な形、あるいは世界をつくり出してゆこうということではないのです。

私達を取り巻く建築状況みたいなものはどう見ておられますか。

坂本:建築家は建築というスクールの状況が建築状況なのだと考えているけれど、そういう建築状況にはほとんど興味はありません。その中での主導権争いみたいなものにも関心はありません。私は我々が生きてゆく空間がもっと自由であった方が良いということに強い関心があるので、フェイマスなアーキテクトの仕事であっても、バナキュラーなものであっても私には等価なのです。

最後に建築を志す人に何か一言。

坂本:建築は楽しんだ方がいいという思いと、建築は大変だなァーという気持ちと両方ありますね。本当に若い人にお勧めできるかどうかわからない。でも好きだったらどんどんやった方がいいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

2002年7月26日　東京工業大学　坂本研究室にて

インタビュアー:須藤和由、青山恭之、林美樹

キャンパスの新顔たち

林 美樹　HAYASHI,Miki
16回生　Studio PRANA

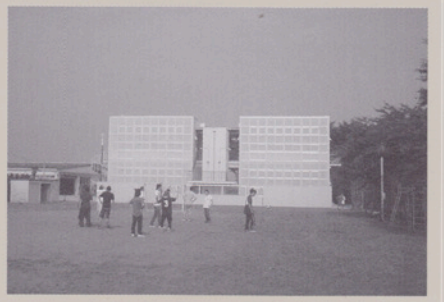
久しぶりにキャンパスを訪れると、学生時代の様々な思い出がそれらの場所の記憶と共によみがえってくる。それは必ずしも大学の表向きの部分ではなく、薄暗く湿っぽい校舎の隙間だったり、ちょっとした日溜まりだったりする。作品制作のために多くの時間を過ごす工房も、自分と向き合いながらその時間を身体に刻み込むそんな場所であろう。

正門から1号館の下をくぐり広場にぬけると、一際そびえ立つカーテンウォールの12号館が視界に入ってくる。その真裏の狭間のような場所に、ガラス箱の破片が地面に刺さったかのような小さな尖り屋根がある。1年前に竣工したガラス工房だ。鷹野台ホールへの近道として8号館の1階を通り抜けると、有機溶剤の臭いが鼻についたのを覚えている人は多いと思うが、工デでは扱う素材をプラスチックからガラスに移行しつつあり、そのために新たにガラス炉をそなえた工房が必要となった。設計の宮下勇教授によると、東西のガラスの立面には一辺9mの正三角形が隠されているらしい。丁度、一つの頂点が3m程地面から持ち上げられており、これは溶解炉からの熱を出来る限り自然に排出するための内部空間として、また構造的にも安定した形状として提案されたものである。持ち上げられた頂点から外にはアーケードがつくられ、外部作業場として活用されている。急勾配の屋根の下部は吸気口となっており、炉の熱で温められた空気はそのまま上昇し、尖り部分に備え付けられた大型ファンで外部に排出される。炉に火が入っている時に内部に入ったが、思ったほどの暑さは感じなかった。暮れ時には桜並木越しに夕日がそそぎ込み、心地よい。当然ながら学生達の評判は上々である。

もう一つは、グラウンドの北側に今年の初夏に竣工した共通彫塑の実習工房である。これは約10m立方のサイコロが2個連なったような構成で、2層で4教室となっている。南北面は大きく開放することが可能で、大作の搬入、搬出も容易である。東西面はグラウンドに近いことからガラスではなく中空ポリカーボネイト板を使用しており、半透明の壁面から和らげられた光が工房全体に行き渡り明るさは十分である。また屋根は光触媒塗料を塗布して水が広がりやすくした上で、散水による冷却を試みている。

当然ながら超低予算のなかで、シンプルな幾何学形態に実験的要素が付加された小建築としての工房に仕上がっている。

ガラス工房　2001



共通彫塑実習工房　2002

織本匠先生を偲んで

青山 恭之　AOYAMA,Yasuyuki
14回生　アトリエ・リング

昨年（平成13年）11月30日、織本匠先生が逝去されました。享年83才と聞くと、まだもう少し‥と思わずにはいられませんでした。大学をおやめになったのも、定年までまだ時間があった時期で、突然の話に驚いた記憶があります。あくまでも先生は先手、先手で生きてこられたのかもしれません。

構造家としての織本先生は、芦原義信先生をはじめ、日本を代表する建築家たちと共同で数々の作品をつくってこられました。重ねて、本学建築学科の設立に参加。1970年から8年間は主任教授として、教育者としても精力的に仕事をされてきました。

今から15年程前、先生がおやめになるというので、建築学科研究室で先生の本をつくることになり、保坂先生を中心に、当時助手をしていた私も編集作業にあたりました。その中で卒業生たちとの話も収録しようと、織本ゼミOB数名に集まっていただいた事がありました。先生はすわって座の中心を占めていたのがとてもかっこよかったし、よくお似合いでした。その日も教え子たちに囲まれ、時の経つのを忘れたように闊達に語られていたものです。

教え子たちを愛した先生は、教え子達からも愛され、12月20日に新宿の太宗寺で行われた葬儀には、たくさんの卒業生が訪れました。寒い、寒い日でした。

織本先生の主な作品:
中央公論ビル/1956、駒沢体育館・管制塔/1964、ソニービル/1966、モントリオール万国博日本館/1967、第一勧業銀行/1981

板橋さざなみ幼稚園ANNEX

遠藤 吉生・遠藤 由美子
ENDO,Yoshitaka・Yumiko
10回生　遠藤建築スタジオ

卒業後の12年間を、それぞれの場所で仕事に就いていた私達は1989年に独立して二人で事務所を設立し、以来13年間共同で仕事をしてきました。

ふだん事務所でひとつのプロジェクトに関わる時間は、建物が竣工するまで1,2年程度であることが多いのですが、この幼稚園は活動13年間のうち11年間ずっと関わりつづけているものです。新しく建築を生み出すことに携わっていても、その後も継続的に関わることが難しい中で、このプロジェクトに出会えたのは幸せな巡り合わせと思っています。

この幼稚園は、23年前設計者であった現理事長により里山の傾斜地をそのまま利用した園舎として建築されました。以来一貫して「自然とともに生活し、のびのびとたくましく生きる力をもつ感性豊かな子を育てる」という教育理念のもとに保育環境を整え続けています。

私たちが関わり始めて、まず手がけたのは将来的な整備目標を視野に入れたマスタープランの作成でした。それに基づいて93年に保育室棟「さざなみ幼稚園ANNEX」(新建築'93)を増築しました。一昨年竣工した「ANNEX2」(新建築'01.5)(建築文化'01.5)は、当初からの念願だった幼稚園の多目的ホールに、地域に開放する「子育て支援センター」を併設した施設となりました。予期していなかった新しい機能が付加されましたが、検討の結果、マスタープランに近い配置・ボリュームの計画になり、マスタープランの妥当性が確認できたように思えました。

ANNEX　1993

ANNEX2　2000

「ANNEX」では敷地の形状、周辺環境との関係についてどう考えるかを重要な課題としました。「ANNEX2」では更に既存の2棟との関係が大きなテーマとなりましたが、同一の敷地内の増築でありながら、形態やテイストの統一による解決としなかったのは、そこに都市的な様相を見出したためです。

「ANNEX2」の完成で園舎の整備は一段落し、現在は園庭の整備工事が進んでいます。

子どもの記憶に残る原風景となり得る環境を提供するということには大きな責任も感じますが、いつも子どもの姿が建築のなかにあり、この仕事に大きな喜びを感じています。

建築はクライアントや利用者の満足度により評価され、それに応える努力は当然ですが、個人的な満足を超えた社会的な存在としての価値は更に重要だと考えています。

実作のコンペや建築展に出展することは、このことの確認作業でもあります。自分の判断が妥当であるのか、社会にきちんとコミットできているのか、心もとない気分を払拭するために、今後も社会的な建築評価に晒されることが必要だと思っています。

遠藤さんは「ANNEX」で旭硝子"INTER・INTRA SPACE DESIGN SELECTION'93"デザイン賞、「ANNEX2」でひろしま建築文化賞,カナダグリーンデザイン賞・優秀賞,アメリカンウッドデザインアワード・Merit Awardを受賞されました。編集部

野々瀬 徹　NONOSE,Toru
7回生　野々瀬建築都市設計事務所

この夏、徳島の県南の海に泳ぎに行った。海と空が分かれるところにクラゲのように浮かんで空を見て漂っているのは、もう極楽気分だった。ふと、私はずっと現実と夢想が別れるところを漂ってきたんだな‥と思った。それは極楽とは遠いものだったけれど。

本を濫読し、精神が発熱していた高校2年の頃、故郷徳島での生活は、退屈で息苦しいものになっていた。本屋で立ち読みした「芸術新潮」で、竹山実の建築の紹介を眼にした。建築にアートとしての表現や、社会への思想的関与の世界があることを初めて知り衝撃を受けた。文学部に進むか迷った末、アートとしての建築を探るのも面白そうだなと、武蔵美の建築学科にゆこうと思った。

入学して、思考や感性を自然に響きあわせられる何人かの人に出会った。徳島ではなかったことで、うれしく解放感を覚えた。

竹山実先生に、話題の作品であった新宿の「2番館」を現地で直接説明をしていただいたり、七夕に青山の事務所に学生達が招かれ、舞台美術家の朝倉摂さんなどのアーチストの人たちの会話を片隅で聞いたり、刺激のある一年間の美大生的生活を送った。しかし、時は1969年、全共闘運動が絶頂へと至ろうとしていた。武蔵美のキャンパスでもデモが頻繁に発生し始め、その中心は建築学科の先輩達だった。やがて全学封鎖が断行され、授業はストップした。建築学科の友人の多くも街頭デモなど、政治闘争に明け暮れる状況になった。私は、共感しつつも闘争に深く関わる気にもなれず、16mmの実験映画をつくって草月の実験フィルムフェスティバルに出したり、舞踏家の元に私淑したり、時にデモの隊列にはいって催涙ガスに追われたりする日々をおくった。やがてバリストは解除され、しばらくして授業が再開された。大学に戻った友人達は、課題で建築デザインの才能を発揮しはじめていた。私は、大学という現実に戻るのにためらいがあり、文学や映画の世界にこもり、時に授業に出るという境界線上を宙づりのままに漂う日々を送った。

ジャストシステム本社屋　1987

その頃、竹山先生が「くも膜下出血」で倒れられた。回復されて、初めての授業の時だったか、気を失なってゆく時に包まれた「深い青色の世界」の話をされた。それを自分も、深く暗い青色の中を漂っているなあと感じながら聞いた。又、ある建築家には「君は地に足がついていない」と指摘された。私は、できることなら地に足などつけたくないと思ってい

ジャストシステム本社屋　1987

た。卒業しても現実感が乏しいままに、とりあえずアトリエ事務所に在籍し、数年後東京の生活に倦んで、なんとなく故郷に吸い寄せられるように帰った。

帰郷して、時が経つうちに、面白い空間感覚に出会うようになった。現実の空間に、少年の頃の思い出の空間が映しこまれたり、東京での空間体験が不意によぎったりするのだ。このような複数の空間の境界線が重なり合う空間感覚を味わうことが、密かな楽しみとなった。相変わらず退屈な故郷の生活の中で、この楽しみは濃密なまでに深まっていった。それが奪われる事態に遭遇して、私は二度防衛する行動をとることになった。

一度目は35歳の頃だった。思い出の凝縮空間だった徳島県庁舎が壊わされることになり、守るために保存運動をした。その渦中で、運動に参加してくる多くの人の建物に対する意識に触れるうちに、人を惹きつける建築の「力」に目覚めた気がした。初めて切実に建築をつくりたいと思った。その頃、ジャストシステムの本社屋の設計の依頼を受けた。コンピュータソフトを創造する空間とは何か？その思索を、感じていた建築の「力」に乗せて計画した。(この作品は「SDレビュー」に入選した。)同じ頃、民家調査をする過程で感じた民家の魅力を抽出した吹き抜け空間をつくろうとし、その熱環境を成立させるためにパッシブソーラーを導入した「徳島の家」を設計した。(この作品は「地域建築賞」を受賞した。)こうして、建築づくりに励むようになり、四国大学のキャンパスの再開発を手がけることになった。

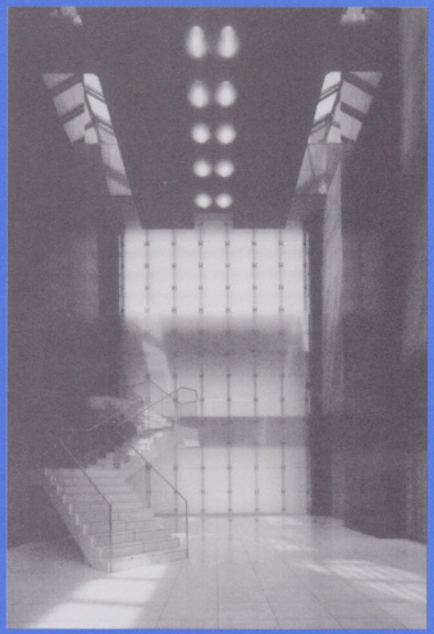
二度目は4年前だった。徳島平野を流れる母なる川として、こよなく愛してきた吉野川の河口にダムがつくられることになり、川を守るためにダム反対の活動に取り組んだ。その中で、自然と人間社会の環境を総合的に評価して、開発と自然保護のあるべき形を見いだすことの必要性を痛感した。それが、「環境影響評価」の世界の学習に導いた。

私は、たまたま遭遇した二つの防衛活動を通して、建築の「力」と、環境の「評価」に出会った。現在は、この二つの境界線が重なり合うところに生まれる、複合した空間感覚をもつ建築を見いだせないかと模索している。

このように、故郷に帰り土着したが、果てしなく境界線上を漂いつづける日々は終わりそうにない。

写真提供：:大竹 静市郎

幸田邸　1991



ジャストシステム本社ブレインズ1　1997

同級生の眼

須藤 和由　SUDO, Kazuyoshi
6回生　須藤事務所

野々瀬君とは身の丈も変わらないし、こぼれる人となりから親近感を抱き、入学早々気の合う友人の一人となった。ただ彼も言うように、僕達が入学した1969年はムサビの学生にとって激動の時代だった。その激動の余韻が引かぬまま、残りの時間を慌ただしく過ごし、押されるようにそれぞれの思いを持って僕達は社会に出て行った。彼と共有した時間は、そんな激動の時代にあっては、少々趣を異にしていた。実験映画の撮影を手伝ったり、芸術祭のオブジェのためと深夜、千葉の海岸で砂をトラックに積んだり、その帰り大事故にあったりと。野々瀬君が故郷の徳島に戻ったことを知らされたのは、大学を出て数年たったころだった。それからの彼の活動は、本人から、あるいは雑誌や各種のメディアから、聞いたり見たり読んだりして、断片的には知っている。それでも時々、彼は何をしているのだろうと無性に知りたくなってくる。どんな境界線上に身を置いているのだろうと。

COMPETITION "WEST KOWLOON"

杉江 智　SUGIE,Satoshi
KWAH,Meng Ching
武蔵野美術大学大学院

世界の建築家達と同じ舞台に立つ機会を、僕達は様々な人達に支えられながら、幸運にも得ることができた。去年の5月から9月にかけ、「香港西九龍再開発コンセプトプラン国際コンペ」に大学院竹山実研究室を主体に参加することとなった。メンバーは竹山実教授をチームリーダーに、非常勤講師の渡辺英二先生、大学院生と、さらにカナダのBritish Columbia大学のJerzy Wojtowicz教授ら、ポーランドのKazimierz Butelski氏らという構成で、3カ国をインターネットで結び、プロジェクトチームを結成した。

香港特別行政区政府は九龍のヴィクトリアハーバー沿いの埋立地の約40haにも及ぶ敷地を香港の芸術、文化、エンターテイメントの発信地にすることを主旨とし、1等賞金を300万香港ドル（1ドル=約16円）と設定し、I.M.ペイ氏を名誉アドバイザーに迎えた。アジアの芸術文化の中心地としたい政府の意気込みは、敷地の隣に計画されている超高層ビルの580mという世界一の高さにも表れている。

全景パース

僕達はまず要求されたプログラムを理解するために、英語の翻訳から始め、世界の文化施設やランドスケープデザイン、アーバンデザインの資料を収集し、互いの案を持ち寄り、イメージを膨らませていく流れの中で、現地調査のため香港まで訪れた。現地では、香港大学の学生の案内で様々な角度から都市・香港を体験することができた。

3カ国間のコミュニケーションの手段は、図面やパースや模型写真などのFTPサーバーへの投稿に完全に委ねられた。言葉は断然少なかった。一つの絵から互いにイメージを膨らまし、何がいいたいのかを読み取る。また日本側が平面図を載せると、翌日その図面がCGとしてたちあがっている。ポーランドから送られて来たパースの色彩から、そのパースを描いた会ったことのない人物の性格を想像したりして、見えないチームメイトのイメージを同時に膨らます制作過程を僕達は楽しんだ。

物理的な距離があっても、小さな組織が新しいコミュニケーションの手段を活かすことができれば、どんな大きい組織にも匹敵する力をもてることがこのコンペで証明された。世界30カ国から161案が寄せられた中で、僕達は入賞することができた。1等にはノーマン・フォスター案が選ばれ、ほかの入賞者も今後この地の再開発にかかわる可能性があるという。

香港では「福」という字を逆さまにすると幸福を呼ぶという意味をもつ。カナダから送られて来たパースの中に描かれた3つの逆さまの「福」を縁起を担いで1つに削った、あくまでも1等を狙うチームリーダーの背中を見て、触発されながら、僕達はこのコンペを通して世界を意識する姿勢をもつことができた。

◎ 今年のヴェネチアビエンナーレ会場で日本の建築家作品のあまりの多さに驚く。ここのところイタリアでは伊東豊雄氏の展覧会が相次ぎ、ジャーナリズムにもたびたび登場している。◎70年代、伊東豊雄氏と坂本一成先生は建築への思いを共有していた。実務畑の伊東氏とは違い、大学の研究室を活動の場として選ばれた坂本先生の実作は少ない。最近ギャラリー間で展覧会をおえたばかりの先生は、身も心も爽やかな御様子で、新しいプロジェクトに意欲的に取り組まれているようである。まだ秘密だそうだが、近々皆があっと驚くような作品が発表されるかもしれない。◎過去のものは見たくないとおっしゃっていた先生だが、お願いして、表紙には多木浩二氏撮影の「代田の町屋」を使わせていただいた。その空間が発する力は今も衰えない。「有名建築もヴァナキュラーな建築も等価である」という言葉に、建築という行為への姿勢、先生の生き方そのものを感じる。◎織本先生には、編集部としてインタビューを計画していたのだが、実現できぬまま、お別れの時がきてしまった。心から御冥福をお祈りします。(M.H.)

OBギャラリーの参加者を募集します。
2003年1月9日～14日（建築祭期間中）
詳細は事務局青山まで（048-822-3894）
日月会総会は1月11日（土）の予定です。

フォルマ・フォロ
Vol.3 2002.11.1

編集：林 美樹、須藤和由、青山恭之、古川泰悟
デザインフォーマット：矢萩喜従郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
http://www.nichigetsu.org
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内